

法華經の第四に云はく「如来の現在にすら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」等云云。同第五に云はく「一切世間怨多くして信じ難し」等云云。涅槃經の三十八に云はく「爾の時に外道に無量の人有り 心に瞋恚を生ず」等云云。又云はく「爾の時に多く無量の外道有り。和合して共に摩伽陀王阿闍世の前に往きぬ 今は唯一の大悪人有り、瞿曇沙門なり。王未だ検校せず、我等甚だ畏る。一切世間の悪人、利養の為の故に其の所に往集して眷屬と為る。乃至迦葉・舍利弗・目犍連」等云云。如来現在猶多怨嫉の心是なり。得一大徳、天台智者大師を罵詈して曰く「智公汝は是誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て而も覆面舌の所説の教時を謗ず」と。又云はく「豈是顛狂の人ならずや」等云云。南都七大寺の高徳等護命僧都・景信律師等三百余人、伝教大師を罵詈して曰く「西夏に鬼弁婆羅門有り、東土に巧言を吐く秃頭の沙門あり。此乃ち物類冥召して世間を誑惑す」等云云。秀句に云はく「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり、浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」云云。

夫在世と滅後正像二千年の間に法華經の行者唯三人有り。所謂、仏と天台・伝教となり。真言宗の善無畏・不空等、華嚴宗の杜順・智儼等、三論法相等の人師等は実經の文を会して権の義に順ぜしむる人々なり。竜樹・天親等の論師は内に鑑みて外に発せざる論師なり。經の如く宣伝すること正法の四依も天台・伝教には如かず。而るに仏記の如くんば末法に入って法華經の行者有るべし。其の時の大難在世に超過せん云云。仏に九横の大難有り。所謂孫陀梨が謗と、金鏘と、馬麥と、琉璃の積を殺すと、乞食空鉢と、旃遮女の謗と、調達が山を推すと、寒風に衣を索む等なり。其の上一切の外道の讒奏は上に引くが如し。記文の如くんば天台・伝教も仏記に及ばず。

之を以て之を案ずるに末法の始めに仏説の如き行者世に出現せんか。而るに文永十年十二月七日武蔵前司殿より佐渡国へ下す状に云はく、自判之在り
佐渡国の流人の僧日蓮、弟子等を引率し、悪行を巧むの由其の聞こえ有り。所行の企て甚だ以て奇怪なり。今より以後、彼の僧に相隨はんの輩に於ては炳誠を加へしむべし。猶以て違犯せしめば、交名を注進せらるべきの由候所なり。仍って執達件の如し。

文永十年十二月七日

沙門 觀 惠 上 る

依智六郎左衛門尉殿等云云。

此の状に云はく「悪行を巧む」等云云。外道が云はく「瞿曇は大悪人なり」等云云。又九横の難一々に之在り。所謂琉璃殺釈と乞食空鉢と寒風索衣とは仏世に超過せる大難なり。恐らくは天台・伝教も未だ此の難に値ひたまはず。当に知るべし、三人に日蓮

を入れて四人と為す。法華經の行者末法に有るか。喜ばしいかな、況滅度後の記文に
当たれり。悲しいかな、国中の諸人阿鼻獄に入りなんとす。茂きを厭うて子細に之を記
さず。心を以て之を惟へ。

文永十一年^{甲戌}正月十四日

日 蓮 花 押

一切の諸人之を見聞し、志有らん人々は互ひに之を語れ。

追って申す。竜樹・天親は共に千部の論師なり。但権大乘を申べて法華經をば心
に存して口に吐きたまはず^{此に口伝有り}。天台・伝教は之を^の宣べて本門の本尊と四菩薩・戒
壇・南無妙法蓮華經の五字と、之を残したまふ。所詮、一には仏授与したまはざる
が故に、二には時機未熟の故なり。今既に時来たれり、四菩薩出現したまはんか。
日蓮此の^ま事先づ之を知りぬ。西王母の^{せいおうぼ}先相には青鳥、客人の^{せいちょう}来相には鴝鵒是なり。
各々我が弟子たらん者は深く此の由を存ぜよ。設ひ身命に及ぶとも退転すること莫
れ。

富木・三郎左衛門尉・^{かわのべ}河野辺等・^{やまとあじり}大和阿闍梨等の^{とのばら}殿原御房達、各々互ひに読み聞
けまいらせさせ給へ。かゝる浮き世には互ひにつねにいるあわせて、ひまもなく後
世ねがわせ給ひ候へ。

^{かわのべ}河野辺殿等中
^{やまと}大和阿闍梨御房等中

謹上 一切我が弟子等中
三郎左衛門尉殿
富木殿

日 蓮